

「かばん屋の相続」 著者：池井戸 潤（いけいど じゅん）

今回は、TVで話題の「半沢直樹シリーズ」「ノーサイドゲーム」「下町ロケット」「陸王」などの原作者である池井戸潤の「かばん屋の相続」の紹介である。

本書は、2006年から08年京都の一澤帆布の相続争いに着想を得た短編小説である。

実際の一澤帆布の争いは、一旦兄側の勝訴で終わるものの、この「かばん屋の相続」が発表されたあとの2009年に遺言状が偽物と判断し最高裁判所により決着した。弟側が勝ちをおさめたのである。

騒動の発端こそ、一澤帆布と重なるが、そこからの話の展開は、当然のことながら、池井戸潤オリジナルのものとなっている。

解説でもあるように、『池井戸潤の小説では、脇役たちもまたしっかりと生きている。主人公と同じレベルで生きているのだ。そうした人間たちが交錯するなかでドラマが生まれてくる。それをある人物の視点から書き下ろした小説である。』

本書は、池上信用金庫の担当者の小倉太郎の視点で、ストーリーを捉えている。そのため、誰が主人公なのかよりも、同じレベルでわき役もしっかりと存在感を放っているため、それぞれの人たちが自身の姿が生き生きと伝わってくるのである。

松田かばんの社長「松田義文」は、肺ガンで急遽亡くなったのである。そして義文の遺言書が弁護士により明らかにされた。内容は、「会社の株を全て兄（長男）に譲る」と書かれていた。

松田家は、男2人兄弟で、現在会社を手伝っているのは次男の「均」のほうだった。長男の「亮」は、かばん屋なんか継ぐのは嫌だといって銀行務めをしていた。社長とも仲が悪く、家にはほとんど寄り付がなく、ろくに口もきかない状況であった。

また、義文（社長）の気質は、こうと言ったら曲げない頑固なところがあり、そう簡単に和解するとも思えない。なぜ、長男に会社を継がせる遺言を残したのか疑問であった。

弟も疑問と不満を持ちながら、最終的には「相続放棄」をすることで決着した。それは亡くなる前に、社長から「相続放棄してお前は自分で会社を作ってそこで頑張れ」と言われていたのだ。

信金の小太郎には、先代との間にどんな話し合いがあったのか知らない。だが、均にとってこの相続の結末は、今までの人生を否定するのに等しいのではなかろうかと思った。そして、なぜ次男の均を経営から外すような相続をしたのか全く分からなかったのである。

会社を継いだ二代目の社長（長男）は、これまでの経営方針を否定し、少量生産から大量生産の廉価版の商品販売による効率化を図る方向に舵を切ったのである。

先代からの職人は、この経営方針を嫌って社員の半分近く（15人程）が、弟均の新しい会社に移ったのである。

二代目社長は、信金に対して融資の相談に訪問したが、信金にしては多額の融資のため検討することとした。（信金側も二代目社長には信頼が持てかったようである。）

そんな時、松田かばんの大手代理店「西京アパレル」が不渡りを出した。松田かばんの売掛金の損失3千万。さらに西京アパレルの連帯保証人に松田かばんがなっていた。連帯保証債務は、5億円。

すでに、松田かばんの口座は差押通知が届いていた。長男の二代目社長から口座引落を要請されたが、当然信金側は拒否せざるを得ない。

信金とのやり取りをしている場に、弟の均が現れ、兄に先代から言われたことを伝えた。「この会社はつぶれる。均は会社を継ぐな。相続を放棄しろ。新しい会社を作れ。」そして連帯保証の件も聞いた。

均は長男の亮に、「先代はいくら兄と喧嘩をしていても、黙ってこのような会社を兄に継がせるような人間ではない。あんな遺言書を親父が作るわけがない。」と伝えた。長男は何も言えなかったのである。（遺言書は、長男が偽造したのであろう。）

そして、松田かばんは自己破産申請をし、一連の回収処理が済んだ後、松田かばんの本社社屋が競売にかけられ、弟の均が落札し、残っていた職人も再雇用し、松田かばんが復活した。

先代の考えていたとおりになった。ただ長男が遺言書を偽造し、後を継いだのが計算違いだったのである。そして、松田かばんの相続はようやく終わり、残された者たちの新しい人生が始まるとしている。